vol.578

mj "高は高才、低は低思、情報はマック"
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2020年11月25日発行ラインナップ
・アグロイノベーション2020in東京ビックサイト
・東北地方の水稲作況状況と出荷状況

# アグロイノベーション2020 in 東京ビックサイト

去る11月11日～13日に一般社団法人日本能率協会主催のアグロイノベーション2020が東京ビッグサイト（東京国際展示場）にて行われた。展示場内では「野菜・果実ワールド2020」「鳥獣対策・ジビエ利活用展2020」「草刈り・除草ワールド2020」「フローラル・イノベーション2020」と中国山東省より50社もの野菜・果物関係の企業が出展していた。最終日に視察したせいなのか、来場者はまばらで残念ながら中国から出展していた殆どの企業は加工野菜サンプルやパンフレットの陳列はされていたものの、中国人スタッフらしき人は片手位しかおらず写真のように展示会場の約1/４を占めたブースは閑散としていた。流石に海外企業の出展はコロナ禍が落ち着くまでは来日出来ないだろう。ここにも新型コロナウイルスの影響が色濃く出ている。普段、生産現場に訪問した際に心がけている事として生産現場での悩みを伺うようにしているのだが、水稲では作業面において水管理や草刈の手間の問題、畑や果樹では鳥獣被害を聞く機会が増えている。特に本年は長雨の影響で里山に木の実などの食べ物が少ないせいか畑や街中でもクマの被害の報道がクローズアックされているが、クマだけでなくカラスやタヌキ、イノシシやシカの被害も多く聞いた年であったと感じている。今回は除草と鳥獣害対策で出展していた企業に絞って紹介したい。

閑散としている中国企業出展ブース

除草関係ではテレビショッピングでお馴染みの高圧洗浄機器メーカー「ケルヒャー」が草を枯らす機材を紹介していた。高温水を当てて草を枯らす除草方法で除草剤等の薬剤を使用せずに２～３日で草を枯らしてしまうという環境に優しい除草方法が紹介されていた。その他の除草機の特徴としては大型化と自動操舵機能を有した除草機が数社展示されており、多少の傾斜であれば滑らずに除草していく事が出来る優秀な除草機が紹介されていた。田んぼの水路は傾斜のある法面が多く、除草するのはとても労を要す作業にて農作業中の転倒事故も起こりやすい。特に草が生い茂るのは暑い夏の時期となるので体力的な労働負担は半端なく厳しく、熱中症や脱水症状が起因となる死亡事故も発生している。自動操舵機能を有した草刈機であれば人間にとって負担が掛からずとても良い機材となろう。水路の掃除や除草は集落全体で集合して行う事が多く、近年ではなかなか人手が集まらず高齢化も進んでいるためこのような機材はニーズが広がっていくのではないかと感じた次第だ。

24時間自動草刈可能

鳥獣被害対策として出展していた企業はNTTドコモやマスプロ等が出展していた。通信機器を駆使し畑に侵入したらスマホにラインやメールで通知する手法だ。ただし、畑に侵入した事を知らせる機材だとどうしても現場に到着した時には既に作物の食害被害に見遭われた後という事が多く耳にする。生産者の意見を聞く限りでは出来れば畑に侵入しないようにするための方法があれば使ってみたいという意見を聞く事が多い。電柵も有効な手段なのだが、鳥やシカ等は飛び越えて被害をもたらす。鳥獣が嫌がるような忌避的効果のあるものがあれば商品としてあればヒットするのではないかと思う次第だが本展においては残念ながらそのような効果を狙った資材は展示されてなかった。その他には鳥獣駆除した後の有効活用としてジビエ食材としてPRする取組や食べ方のレシピ紹介、加工食品の試食会をされていた。鹿肉の燻製サンプルを食してみたところ、処理の仕方のせいなのか匂いやクセも少なく意外にもイケた。地方の集落で静かに消費されてきたものが、都会に住む人々達に広く周知される取組は望ましいことではないだろうか。最後に取材当日はコロナウイルス感染拡大の第３波襲来かと騒がしい時期に開催が重なったことも災いしたと思われるが、活気がイマイチ感じられない。一日でも早く活気あふれた展示会が開催される日を望んでやまない。

# 東北地方の水稲作況と出荷状況　難しいカメムシ防除

東北地区は全般に天候にも恵まれ、東北全体で104と北海道の106に次ぐ作況指数となった。なかでも青森・秋田両県は105と東北地区のなかでも同率トップの高い指数となっている。まずは秋田県の状況であるが、各地域で多少の差はあるもののアキタコマチなど概ね作況指数通りの収量があったようだ。又、本年は全国的にカメムシの被害が甚大であったが、同県も各地で被害を受け、県央から県北においてはいもち病が発生した地域も散見された。本年度の１等米比率は全国平均80.7％（９月末時点）で、猛暑の影響で品質が低下した19年同月より13.1％上昇したが、秋田県産の１等米比率は94.2％と東北でも青森に次ぐ高いポイントなった。７月の長雨や８月の高温による品質低下が懸念されたが、生産者が適切な水管理などに取り組んだ結果と思われる。続いて青森県の状況であるが、同県も秋田県同様、まっしぐらなど作況指数並みの収量を得られたところが多く、増収となった。又同県も他県同様、特に南部地区はカメムシの影響はあったものの、１等米比率95.2％と山形県と同率で全国トップの数値をたたき出している。東北においては全般的に作況指数並みに取れたという声の方が多いのだが、このコロナ禍による業務用での米消費が低調のためどの産地も米が例年通り消費地に出て行かず米価は下落、おまけに倉庫はパンパンで動かない状況だ。本年は東京オリンピックの開催が予定されていたが、オリンピック需要に合わせて生産していた銘柄米が卸から開催延期に伴いキャンセルが出て行き場を失ったので購入してくれる所はないか、業務用向けに予定していた多収穫米が動かなく出荷用のフレコンバックまで供給されて出荷を待つ状態であったものの、出荷前の直前になってキャンセル扱いされ契約不履行となっているという惨い扱いを受けているという生産者からの悲痛な声も聞こえている。

次年度の主食用米はどれ位下がるのか、といった心配をする声ばかりが主産地から聞こえている。次年度の生産調整の比率はどれ位あがるのか、政府備蓄米の動きや飼料用米の政策面の動きはどうなるのかといった現場からの情報を求める声も大きい。年内までには次年度の生産計画を立てたいが政策面の方針がはっきりしていないため生産計画を決め兼ねているという声が強く、これに伴う肥料を始めとした生産資材の発注を先伸ばしにせざるを得ない事態も出ており、例年通りの生産資材の動きとはならないようだ。よって、近年増加傾向である当用買いの傾向が更に増す動きとなるような気配が濃厚だ。どのメーカーも販売側に対して早期受注をお願いしているものの、動かない米で倉庫は目一杯で肥料を入れられる状況にないため、メーカーの対応としてある程度の見越し生産はするものの肥料メーカーの倉庫は満載状態で既に野積み対応で凌ぎつつも、最悪の場合によっては当用期に工場での生産を止めなければならない可能性も出てきた。作りたい銘柄が作れずノンデリを起こしかねない状況が見え隠れする。コロナの影響がとうとう肥料メーカーの生産にも影響が出て来る事態となっている。

カメムシの防除については広域共同防除で散布時期が決まってしまっているので出穂期にうまく当たらなかった、適期に散布していてもカメムシの個体数が多すぎて被害は少なかったものの被害粒は出てしまった、品種によっては出穂期間が長いために薬の効きが甘くなり、効果が薄くカメムシ防除を２回散布行って対処したという話がある。出穂期に長雨にあたり防除がうまく出来なかった事も重なったという話もあった。カメムシの防除については作業が一時期に集中してしまっているので作業面において適切な防除に至らなく被害につながってしまったという残念な声もある。広域防除を行っている地域はお天道様次第なのでどうしようもない点もあろう。

米の集荷先では色彩選別機が活躍している話が聞かれており、色選を別途かけて被害粒を除去してから等級検査を行うケースが多い。経営面積の大きい生産法人や米集荷業者の話では色選を導入しないと等級検査で上位級に上げられないため色選機が普及するのではないか、小さな農家は費用がかけられないのでこういった作業賃も商売となるので導入してもペイ出来るとの声も聞かれている。（東京支店）

---

新型コロナウィルスの第三波が影響を及ぼし始めています。年末に向け人が集まる機会も多くなると思いますが、最大限の配慮と注意を欠かさずにしたいですね。

編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp